第1次・2次比国ミンドロ島遠征

酒井隆志

1985年8月、私は新たなフィールドを求めてフィリピン・ミンドロ島へと渡った。私も三年になり、リーダー学年ということで後輩の育成面での責任がある。当時一年生だった田村も同行する事になるが、彼に少数民族に対する興味を持たせる事もひとつの狙いとしていた。

フィールドの選定に当たっては慎重を期した。そして市大探検部がまだだれも行っていないフィールド、という理由から絞りこんだ結果がミンドロ島になった訳である。

当時の私は帰国後、民族誌を書くつもりでいたので、1960年代の探検部の活動記録は随分と参考にさせてもらった。私自身、60年代の活動に非常に興味があったのと、80年代に入部した自分には世界的に見て、地理的空白地帯はもちろんのこと、未開地さえもが失われようとしている現実に対する焦りの様なものがあった。

私がフィールドワークを行ったのはミンドロ島に住むマンヤンと総称される少数民族のひとつ、ブヒッドで、特定の部落にある程度住み込むことにより、適切なインフォーマントから情報を入手するという方法をとった。その点私の滞在したバタンガンという部落は英語を話せる者が比較的多く、開けたところだったので快適ではあった。

そんなある日のこと、グロリアというクリスチャンネームの若くてはにかんだ表情のかわいい女の子が、ノート鉛筆をもってやって来た。日本語を教えてくれと言うのである。すると田村は筆記用具を受け取った私にささやいた。「酒井さん、俺が教えましょうか」

ここの部落には子供がやたらと多く、みんな純粋でかわいい。しかし10代で結婚する子が大部分のため、未婚の適齢期の女性はほとんどいない。グロリアはそんな数少ない女性のひとりだ。

私はアルファベットで日本語の表現を教えた。彼らは一応文字を持ってはいるのだが、40個程度の何か記号のようなシンプルな文字で、私の手には負えない。そのうちたちまち人垣が出来、「こんにちは」「愛してます」と覚えたての日本語が飛び交うこととなってしまった。

帰国後、当初の予定通り民族誌を書き上げると、私はもう次の計画を立てていた。それは幻の“バゴン族”と接触することである。ブヒッドの部落にいる時、さらに奥地に行けば“バゴン”と呼ばれる未開民族がいると聞かされていたので、私の探検部での活動の総決算の意味で今まで以上に全面に打ち出して参加を募った。結果、台湾にもいっしょに行った内野、一年生の大槻、高梨の三人の参加が決まり、マルコスの国外脱出にまで発展した革命直後の1986年3月、再びミンドロ島に渡ることとなった。

しかし今回ばかりは自分の思った通りにはいかず、成果も上がらなかった。

敗因は、奥地には共産ゲリラがいて危険だとか、川を何度も渡らなければならず、水量も多いと言った現地ガイドの言葉を真にうけて、リスキーな選択を避け、彼らの知識の中にある部落ばかりを廻ってしまい、結果的に“バゴン”と呼ばれている部族の部落に行けなかった事にもあるが、最大の敗因は私自身の探検活動に対する情熱が急速に冷めてしまった事にあると思う。

ある部落での夕方頃、晩のおかずにする鶏をしめている所を他の隊員みんなが見に行っているとき、私はひとり、別のところで焼畑のため燃えている山の斜面をぼんやり眺めていた。そしてつぶやいた。

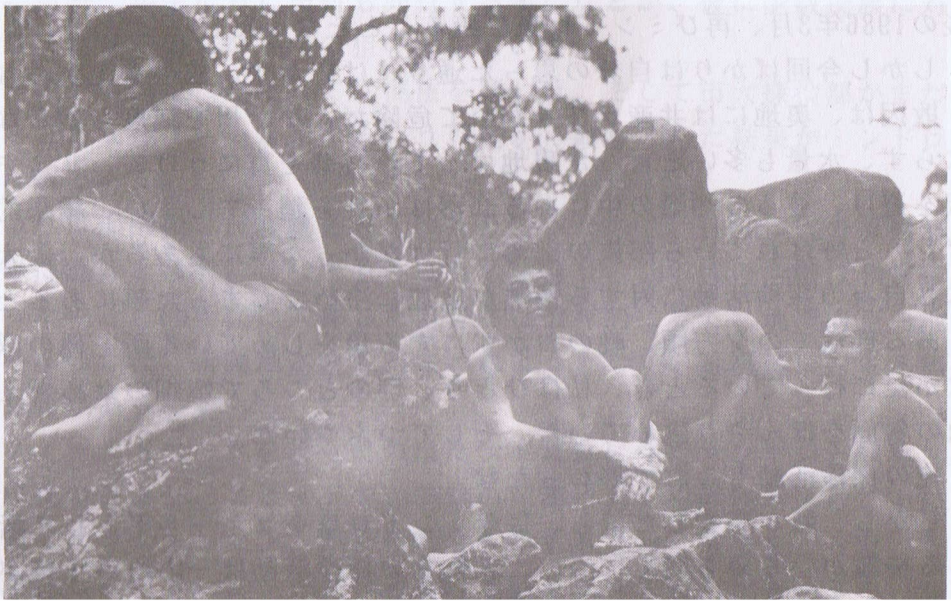
「俺の探検活動もこれで終わったな」

しかし、私が卒業した後も、毎年ミンドロ島をフィールドとして活動している後輩がいる事を聞くにつけ、私個人の探検活動は一応の終止符が打たれはしたけれども、自分の残した道が広く長く続いているのを感じ、満足な気持ちでいっぱいだ。

第1次ミンドロ島遠征

［期間］　1985年 8月 6日～ 9月 3日
［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　山地焼畑農耕民の調査
［隊員］　隊長　酒井隆志　（商学部3年）
　　田村康一　（文理学部1年）

第2次ミンドロ島遠征

［期間］　1986年 3月 5日～ 4月2日

［地域］　フィリピン共和国ミンドロ島
［目的］　“バゴン族”の物質文化・精神文化の調査
［隊員］　隊長　酒井隆志　（商学部３年）
　　内野健太　（文理学部１年）
　　大槻英二　（文理学部１年）
　　高梨洋之　（商学部１年）